

## 大学生を対象とした防災意識に影響を与える規定要因の分析

愛媛大学大学院 学生会員 ○大西諄 愛媛大学防災情報研究センター 正会員 二神透

### 1. 背景

近年では地震だけではなく地球温暖化による異常気象等によって大規模な自然災害が引き起こされている。1995年に発生した阪神淡路大震災以降、地域コミュニティによる自助共助の重要性が再認識された。地域の防災力を高めるために、防災活動をけん引する防災リーダーとして注目されているのが「防災士」である。東日本大震災をきっかけに2011年以降、全国的に防災士数は飛躍的に増加しており、2021年12月現在、累計で18万人を超える方が認証されている<sup>1)</sup>。愛媛県については防災士の養成についても積極的であり、愛媛大学や松山市などが主催の「防災士養成講座」や「環境防災学」があり、幅広い世代における防災士の育成にも力を入れている。しかしながら防災士を取得した後の活動状況には未だに課題が残されている。今西ら<sup>2)</sup>の研究によると愛媛県内で防災士を取得している社会人のうち、実際に継続して防災活動を行っているのは全体のうち3人に1人程度にとどまっていることを明らかにしている。また大学生についても防災士を取得後の活動率は本年度のアンケート結果より5分の1以下というデータがある。

### 2. 目的

本研究では、若い世代として大学生に着目して分析を行った。大学生の中でも現在、継続して防災活動を行っている愛媛大学防災リーダークラブの大学生、防災活動に対する参加意向が高いと予想される学生防災士、一般の大学生3者へのアンケート調査から、意識構造や防災意識を比較することにより、どのような意識へのアプローチが防災活動継続に有効かの検討を行う。また、同様に一般学生と学生防災士との比較や学生防災士と防災リーダークラブ学生との比較により、防災活動参加率が低迷している原因を分析する。その結果から、多様な主体が地域防災活動に参画するための要因を探り、地域防災活動の活性化や、大規模災害時の被害の軽減につなげる。

### 3. 実施アンケートの概要

本調査では、愛媛大学工学部および社会共創学部の学生、令和3年度環境防災学の受講生、愛媛大学防災リーダークラブ所属者を対象とし、それぞれ一般学生、学生防災士、防災活動継続学生(以下、活動継続学生と表記)として扱っている。なお一般学生の内訳としては工学部授業「確率・統計学」受講者1回生約100名、社会共創学部授業「新入生セミナーB」受講者1回生約150名となっている。学生防災士については令和3年度環境防災学受講生約170名、活動継続学生については愛媛大学防災リーダークラブ所属者65名となっている。本アンケート調査の設問項目を表-1に示す。なお質問1から質問4における回答方法は、5件法を採用している。

表-1 アンケート設問項目

質問1	防災活動参加意向 利他的防災意識	防災活動に参加したい 誰かのために取り組むべきだ
質問2	対処有効性認知、自己効力感 現状危機認知	活動に取り組まなければいけない 住んでいる地域は危険である
質問3	周囲の人々の意識、個人規範 防災対策への興味・関心	周囲は自分に対して肯定的 地域の防災活動に興味がある
質問4	地域愛着、地域コミュニティ	まちの一員であると感じる 地域に愛着がある
質問5	個人属性	性別、年代、居住年数 被災経験の有無 等

#### 4. 防災士資格取得の規定要因に関する分析

大学生における、防災士資格取得に影響する要因について特定するために一般学生、学生防災士において平均値の差の検定(以下、t検定と記す)及び二項ロジスティック回帰分析を行う。ロジスティック回帰分析の従属変数は、一般学生を0、学生防災士を1とするダミー変数を用いている。表-2に、一般学生と学生防災士における分析の結果を示す。大学生といった若い世代については、長い間地域に住んでいる人たちとの交流が少ないことから、地域が主催する防災活動・訓練ではなく、範囲の広い行政が主催する防災活動・訓練のほうが参加しやすいためではないかと推測する。また避難所運営や、自己効力感と言った意識が統計的に有意となっていることから今後は避難所運営ゲーム(HUG)の波及や、自分一人でも実施可能な防災対策を進めていくことで、防災士の取得に大きく影響することから、今後は家庭防災を広めていくことも重要になると考える。

表-2 一般学生と学生防災士における分析結果(\*\*\*:p<.001, \*\*:p<.01, \*:p<.05)

設問内容	平均値			ロジスティック回帰	
	一般学生	学生防災士	p	$\beta$	p
避難所運営に携わりたい	3.15	3.99	**	0.619	***
行政の講習や訓練に参加したい	3.09	3.90	***	0.557	***
自分一人では被害を減らせない	3.26	2.59	**	-0.408	***

#### 5. 防災活動継続の規定要因に関する分析

大学生における、防災士資格取得後の防災活動継続に影響する要因について特定するために学生防災士、活動継続学生において平均値の差の検定(以下、t検定と記す)及び二項ロジスティック回帰分析を行う。ロジスティック回帰分析の従属変数は、学生防災士を0、活動継続学生を1とするダミー変数を用いている。表-3に、学生防災士と継続学生における分析の結果を示す。地域愛着について、大学生は、社会人と比較して、自分が生まれ育った地区の居住年数が比較的短いことから、防災に対する基礎知識と言った座学的要素のみならず、自分が生まれ育った地域のよさを共有し合う講義時間を新たに設けることが重要ではないかと推測する。具体的には出身地域や都道府県に分かれたグループディスカッションを行い、同じ出身地域同士での意見共有を行うことである。これにより、災害に対する知識を育みつつ、地元に対する愛着も併せて強めることができ、防災士取得後における活動継続率の向上に繋がるのではないかと考える。

表-2 学生防災士と学生防災リーダーにおける分析結果(\*\*\*:p<.001, \*\*:p<.01, \*:p<.05)

設問内容	平均値			ロジスティック回帰	
	学生防災士	防災リーダー	p	$\beta$	p
今後も防災活動を継続したいと思う	4.18	4.37	**	1.151	***
防災に関するニュースに関心がある	3.50	4.44	***	0.726	*
活動は地域の熱心な人に任せれば良い	3.31	4.34	**	-0.644	***
今後も自分のまちに住み続けたい	4.09	4.28	*	0.381	*

#### 6. 考察・まとめ

本研究では大学生に着目し、一般学生、学生防災士、活動継続学生を対象にアンケート調査を実施した。ロジスティック回帰分析の、「家庭防災」が防災士取得に影響を及ぼすことから、今後は行政機関が積極的に身近な家庭防災のイベントや、防災グッズ等の波及により一層、取り組んでいくことが重要ではないかと考える。また今後の学生防災士における、防災活動継続率の向上の為には“環境防災学”の講義において、出身地を想起させる機会を設けることで地域愛着が深まり、今後の防災活動継続率の向上に寄与するであろうと考える。

#### 参考文献

- 1) 日本防災士機構：防災士について <http://bousaisi.jp/>
- 2) 今西桃子, 二神透, 羽鳥剛史, 井出皓介：地域防災リーダー指向者の防災活動参加意向に対する規定要因の分析, 土木学会論文集 F3(土木計画学), 第54回, 1032-1035(141), 2016